台東区区民憲章策定区民会議
第６回草案作成グループ会議　議事概要

平成 18 年８月 29 日（火）　17:00～19:00
台東区役所 901 会議室

１．ひらがな表記について

・ ひらがなでは文字数をできるだけそろえた。漢字にするとそれがなくなる。また、漢字についてはどう変換するかで受ける印象がだいぶ変わってくる。当初の案の通り、ひらがなの方がよい。
・ 今後、区民憲章を普及していく上で、形式にこだわるのは区民憲章づくりにおいては避けることはできないのではないか。内容にこだわり過ぎると長い文章でもよくなる。草案作成グループでは、内容と形式は両輪のものとして議論してきた。また、他の自治体では、ひらがなだけの本文がみられないという独自性も大きな要因である。
・ 草案作成グループのメンバーで、数多くの議論を積み重ねて、ひらがなの方が漢字よりもイメージが広がりやすいなどの理由により、ひらがなに至っている。ひらがな案を覆すことはむずかしい。ひらがなだけの表現に疑問があるのは当然なので、Q＆A でこれまでの議論の経過をきちんと説明すればよいのではないか。
・ 区民憲章づくりのプロセスを知っている人ほど、憲章案に対する評価は高くなる傾向があるように思う。草案作成グループでは、極限まで表現を削ぎ落とすよう議論してきた経緯がある。これから草案作成グループの委員に求められるのは、ひらがな案に反対の人たちに納得してもらう努力であると思う。それぐらい現段階の案については自信を持っている。
・ きちんと説明することで憲章についての理解は増すと思う。推進活動を通じて策定の経過も含めて多くの人に説明していくことが必要である。本文各行１つに漢字１文字を用いることも考えて見比べてみたがうまくいかなかった。時間をかければかけるほど思い入れが深くなるのは当然であるが、初めてみた人がひらがな表現に疑問を感じるのも一方で理解できる。
・ 疑問を抱くことは関心・興味を広くもってもらうという意味で評価できるのではないか。これまでの記録を踏まえて、伝える努力が必要である。
・ 全否定している意見はあまりみられない。
・ 初めてみれば違和感はあるのは当然だろう。どうすれば納得してもらえるのか悩んだが、それぞれの人の感性・知性・理性の問題であると思う。芭蕉の俳句は当初知らない人が多いことに驚いたが、説明を重ねて納得してもらった経緯がある。ひらがなの広い意味

を理解してもらうのは大変難しく、時間がかかるかもしれない。万葉集は全部漢字だったが、それを全部訳したのが平仮名である。斬新性、話題性、意外性、物語性がないと皆関心を示してくれない。現代、ひらがなはとっつき難いかもしれないが、読みほぐしていくうちに味が出てくる部分もある。また、レイアウト上の美しさも十分に考慮している。こうした点を納得してもらっていないのは、我々の理解してもらうための努力が足りないのかもしれない。

・ ひらがなは斬新的である。前回の全体会でおおむね納得してもらったものと理解していた。草案作成グループとしては、今後はさらに理解してもらうための努力をしていく段階であろう。

※三輪副会長より以下のアドバイス・補足等があった

・ 区民憲章は、本来行動の出発点になるべきものであり、読み手の行動に結びついて初めて意味がある。

・ ひらがなは文化度が非常に高い。マスコミは、ひらがなを使用することで、必ず好意的に取り上げてくれるはずである。ただし、なぜひらがなかという理由を知らなければ意味がない。日本は従来、言葉を持っていたが、文字を持っていなかった。そうしたなか、中国から漢字が輸入され、さらに万葉和語、ひらがなが生まれた。漢字の訓読みはその後に広まった。漢語は外来語である。和語は無文字の時代の言葉なので、声に出さないと意味が伝わらない。なぜ、ひらがなで表記されているのかの回答は、本文の条文が和語だけで成り立っていることにより、行動が自然に喚起されることである。だからこそ、憲章は作り放しにしては何ら意味がない。

・ ひらがなのみで表現することの文化的価値は極めて高いと考える。全国的に市民憲章運動は再び盛り上がっているので、インパクトのある憲章の先駆けとして注目度は極めて高いであろう。

<u>→以上の議論より、現案通りひらがなのままとする。</u>

２．本文「にぎやかな」の表現内容について

・ 本条文で盛り込みたい内容は、「繁盛」や、おもてなしの笑顔でたくさんの方々に台東区に来てもらいたいという思いである。

・ 「にぎやかな」には広がりがあるが、「にぎわい」には往来の行き来だけを表現しているように感じる。

・ 台東区に最もふさわしい言葉は、人が気持ちよく集まってくる状態を指す「にぎにぎし

い」という言葉である。「にぎ」が付く言葉は皆よい意味である。

- 草案作成グループの終盤の議論で、形容動詞に合わせること、語感の理由から「にぎやかな」に変わった経緯を説明する必要があるのではないか。
- 「～なまち」に統一する形式を重視した経緯もある。
- 他地域の掲げる「おもてなし」と、台東区の「おもてなし」との違いが何か考えると、台東区はやはり商売繁盛、産業振興の観点であろう。誤解を招かないよう、商売繁盛の意味も含める「にぎやかな」のままの方がよいのではないか。
- 「にぎやかな」が雑踏と同じに捉えられているが、「にぎやかな」には商売繁盛の意味も含まれている。
- 本文において、形容動詞を使用して「～なまち」と表現をそろえている事例は形容詞と比べると非常に少ない。また、１か条だけ形容詞にすると、他の形容動詞も気になり始める。
- 「にぎやかな」という言葉が不快感を持つ人が多いのであれば、区民憲章に使用するのは慎重に考えるべきであろう。ただ、個人的には「にぎやかな」という言葉で、「さわがしい」などの否定的なイメージはなく、またそれほどマイナスのイメージを持っている人が多いとは思えない。
- 「にぎやかな」に対するマイナスイメージは多いというより、一部に強い反対があったという理解をしている。強い拒否感があれば、パブリックコメントでも出てくるのではないか。
- 「にぎやかな」の方が話し言葉で口に出すことが多い。
- 「にぎやかな」には、「にぎわう」よりも音や色のイメージがあり広がりがある。

<u>→以上の議論より、現案通り「にぎやかな」のままとする。</u>

３．前文の表現内容について

＜委員からの前文修正案 a ＞

（前文）
　わたくしたちのまち台東区は、江戸の昔に「花の雲　鐘は上野か　浅草か」と詠まれ、すぐれた芸術・芸能を生み、四季折々の行事を始め、ものづくりの技や気さくで人情あふれる暮らしが今もあちらこちらに息づいています。
　わたくしたちは、先人が築いてきた多様な地域の文化や環境を大切に、誇りをもって、ひとりひとりが素晴らしいまち台東区をめざします。

＜委員からの前文修正案 b ＞

（前文）
　わたくしたちのまち台東区は、江戸の昔に「花の雲　鐘は上野か　浅草か」と詠まれたような風雅な土地柄であり、その輝ける伝統を守って、今も、工夫に満ちた匠の技や気さくで人情あふれる暮らしがあちらこちらに息づいています。
　わたくしたちは、この台東区を誇りとし、先人が築いてきた文化や環境を大切にして、次の世代につなげてゆくために、心を合わせ、この憲章を定めます。

※三輪副会長より以下のアドバイス・補足等があった

・ 前回の全体会において指摘された、「詠まれ～」の後のつなぎの表現の必要性、「工夫に満ちた」という表現への抵抗感、また、最後の文章の言い切り表現について決意表明であることを伝えることの必要性についてはもっともに感じた。
・ 前文については、これらの３点を中心に議論していただければよいのではないか。
　以上をふまえて以下の議論がなされた。

■「工夫に満ちた匠の技」という表現について

・ 「工夫に満ちた匠の技」という表現では、「匠」には既に「工夫」の意味が含まれている。この「匠」と「工夫」の重複を避ける意味と、台東区においては職人（手の技術でものをつくることを職業とする人）が多いので、「今も、工夫に満ちた匠の技」に代えて「ものづくりの技」と表現してはどうか。
・ いずれの修正案も内容を盛り込み過ぎて説明的な印象を受ける。次から次へと内容を入れれば入れるほど焦点がぼやける感がある。
・ 美しさの観点から言えば、元の方がよい。副題を「あしたへ」という短い表現に決めた時の精神を振り返ると、前文もできるだけ短い方がよい。
・ 「匠」という言葉には、製造業以外の業種も含まれているが、「ものづくり」とすると製造業に限定されてしまう恐れがある。
・ 芭蕉の俳句は桜のイメージを持っている。「四季折々の行事のなかで優れた芸術・芸能

を生み」としてはいかがか。「四季折々」という言葉は美しいが、「行事」に代わる言葉はないだろうか。

・「匠」という表現には、芸術・芸能の概念も含まれているので、あえて「芸術・芸能」を表現する必要はないのではないか。

・「匠の技」は工夫だけで言い切れないのではないか、その他の要素も含めて「匠の技」につながっているのではないか、という意見もある。また、職人にかかる修飾語としては「鍛え抜かれた」「磨かれた」「磨き抜かれた」などがあるが、これらの修飾語は、商業に関わる人に使用してもよいのではないか。

・工夫は、創造性、前進性、将来性を表現している。そのため、次に「気さくで人情あふれる」と続いている。
・「今も工夫に満ちた」を「磨き抜かれた」にしてはどうか。

→以上の議論より、「工夫に満ちた匠の技」は、「磨き抜かれた匠の技」とする。

■「詠まれ」と「今も」をつなぐ表現について

・「今も」は「息づいています」の直前に付けて、「今も息づいています」とすることでより強調的な表現としたい。
・「「江戸の昔に「花の雲　鐘は上野か　浅草か」と詠まれたわたくしたちのまち台東区は」として、冒頭に芭蕉の俳句を入れてみてはどうか。前文は唱和しないまでも、声に出して読むことがあろう。その際、俳句は強く詠まれるので、一息付いてリズム感としてもよく、また俳句を使用するインパクトを最大にすることができる。

→芭蕉の俳句を冒頭で使用し、「わたくしたちのまち台東区」に係る修飾語として表現する。

■結びの表現について

・　「この台東区を誇りとし」という表現は言わずもがなの部分もあるので抜いて、「より素晴らしいまちを目指し、この憲章を定めます」としてはいかがか。「この」が重複するので、思い切って「この台東区を誇りとし」を抜く案である。

以上の議論から、以下の文を案として作成

（前文）
　江戸の昔に「花の雲　鐘は上野か　浅草か」と詠まれたわたくしたちのまち台東区は、磨き抜かれた匠の技や気さくで人情あふれる暮らしが、あちらこちらに今も息づいています。
　わたくしたちは、先人が築いてきた文化や環境を大切にして、より素晴らしいまちを目指し、この憲章を定めます。

以上